

令和 6 年 5 月 8 日現在

機関番号：12603

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K12815

研究課題名（和文）宗教現象の再画定をめぐる宗教人類学的研究 ケニア、ドゥルマ社会の悪魔崇拜言説

研究課題名（英文）Anthropological Study on re-delineation of religious phenomena: Devil Worshippers Discourse among the Duruma

研究代表者

岡本 圭史 (Okamoto, Keishi)

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・研究員

研究者番号：90802231

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、宗教概念への問いをその西欧的出自をめぐる問いへと発展させた系譜学的アプローチを、1980年以降のDan Sperberの著作群に依拠する文化への自然主義的アプローチと共に、宗教現象の民族誌的研究へと統合することを試みた。ケニアでのキリスト教の現地調査を実施すると共に、人類学や宗教研究等の諸分野の成果に基づく理論的考察をも実施し、国際学術雑誌への英語論文公開を含む成果を挙げた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

宗教に対する理解は異文化理解の重要な一部分を占めるにもかかわらず、社会問題化したいわば宗教現象の負の側面をめぐる情報がマスメディアでは強調され、価値中立的な宗教理解の機会には十分に提供されていない。更に宗教の定義問題を系譜学的アプローチが更新した後の宗教研究の今日的立場もまた、異文化理解や多様な宗教伝統の理解を必要とする読書人や職業人に十分に還元されていない。本研究のこれまでの成果は主に学術的著作を通じて公開されているものの、同時代の宗教者及び宗教伝統の蓄積した知恵を宗教研究者が同時代人へと伝達する役割の一端を、本研究は果たし得たと判断できる。

研究成果の概要（英文）：Through this research, a genealogical approach to the concept of religion and a naturalistic approach to culture have been integrated to ethnographic research on religious phenomena. Based on fieldwork on Christianity in Kenya, as well as theoretical investigation based on previous studies in anthropology, religious studies among other disciplines, several publications including a theoretical treatise on an international journal have been published.

研究分野：宗教人類学・宗教社会学

キーワード：宗教の系譜学 自然主義的アプローチ 存在論的展開 宗教の認知科学 認知言語学 関連性理論 都市モダニティ

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

19世紀後半から20世紀中盤まで宗教人類学の重要課題とされていた宗教の定義問題が効力を失う一方で、主に1990年代以降には、宗教概念それ自体の西欧的出自や歴史的背景を問う系譜学的アプローチが、宗教人類学の基本的な視座の位置を獲得した。その成果をフィールドワークに基づく宗教現象の民族誌的調査に統合することは、宗教人類学の今日的課題の1つである。この課題の実現に向けて本研究が取り組んだのが、アフリカ等の非西欧的諸社会におけるネイティブの民俗語彙や語りに基づく、宗教概念の再構築ないし宗教現象の再画定である。対象としたのは、申請者がこれまでにフィールドとしてきた、ケニア海岸地方のドゥルマと呼ばれる人々の社会である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ケニア海岸地方ドゥルマ社会における悪魔崇拝者と呼ばれる想像上の人物像をめぐる語りないしその他のオカルト的言説の流通する状況や、更には貧富の差に直面する出稼ぎ民の経済活動という背景をも考慮しつつ、人々の生活世界の民族誌的描写を通じて西欧的・近代的視座に基づく宗教現象の輪郭を再画定することであった。いわゆる宗教現象と政治経済的事象の臨界点に位置するかに見える悪魔崇拝言説に焦点を合わせた上で、出稼ぎ民の集まるモンバサの教会という空間に注目した。現代アフリカのネイティブの視点から西欧的な宗教概念を再構成することを通じて、人間社会の中で重要な位置を占める宗教伝統を捉える視座を可能な限り理論的、歴史的負荷の少ない地点へと導き得る点に、この研究計画の重要な意義がある。

3. 研究の方法

ケニア海岸地方に住むドゥルマの農村や彼等の出稼ぎ先となる海岸部の都市モンバサを対象としたフィールドワークの実施が当初の計画であった。COVID-19による海外渡航の延期や治安の悪化のために海岸部都市の調査は手薄となったものの、農村部住民と都市部出稼ぎ民の生活戦略とオカルト的言説流通の実態を、人類学的フィールドワークを通じて明らかにした。ドゥルマの多く住むモンバサのリコーニ地区における出稼ぎ民の生活実践を、農村での生活との対比において捉えることを計画した。実際にはCOVID-19による調査の延期や海岸部都市における当時の状況等を考慮して農村部により焦点化した調査を実施した。

4. 研究成果

2020年度から21年度までには、COVID-19による海外渡航の延期を余儀なくされる中、上記の問題意識に基づく理論的研究を実施した。22年度及び23年度にはケニアでの現地調査をも実施し、上記の理論的考察をフィールドワークの成果を元に発展させた。主な成果としては、海岸部都市におけるドゥルマ出稼ぎ民の間の病いの語りと妖術言説の関連の検討に加えて（岡本 2021「不幸の内在的理解について」『宗教研究』95:2）。近年の人類学における存在論的展開という理論的潮流をDan Sperberによる文化への自然主義的アプローチやA. Schutzの現象学的社会学と共に検証することを通じた、民族誌的研究への自然主義的視点の導入が挙げられる（Okamoto 2023 *Apparently Conflicting Ontologies*. *Anthropos* 118(2): 335-347）。

自然主義的アプローチとの民族誌的研究への導入に際して試みたのは、心的表象の連鎖として文化を捉えるSperberの理論的モデルを、Schutzの現象学的社会学の視座を主要な補助線として、なおかつドゥルマ社会のフィールドワークの成果を加味しつつ、発展させることであった。SperberとSchutzによる思考の軌跡を辿る作業は未だ途上にあるが、現段階での解釈を提示しておく。恐らくは19世紀末にその起源を持つとされる心的表象概念は初期Husserlの著作においても見出される一方で、少なくとも、それが生活世界の構成をめぐるSchutzの議論における鍵概念となっているようには見えない。間主観性の中で共有される世界の像としての生活世界を心的表象の連鎖と捉えることも今日の観点からは十分に可能であるが、Schutzによる現象学的社会学の枠組みにおいて、生活世界の構成要素たる知識群の収納される場所は必ずしも重要な論点ではない。他方、Sperberの「表象の疫学」の構想においては、個人の脳が心的表象の貯蔵庫として重要な位置を占める一方で、表象の連鎖の空白地帯に存在するいわば暗黙の前提として常識や自明の知識の領域への関心は希薄である。SchutzとSperberの両者において関心の希薄な領域を考慮しつつ、ドゥルマ社会あるいはその他のサハラ以南アフリカ諸地域においては妖術言説の基底に暗黙の前提としての妖術の実在性の想定があるという点に焦点を合わせることで、社会の中にその収納場所を想定し難い暗黙の前提としての常識という領域を想定し得ることを指摘した（Okamoto 2023）。ここでの議論は、アフリカ都市におけるモダンシティと宗教をめぐる議論や、認知語用論の成果を活かした宗教現象の理解、更には呪術と科学をめぐる従来の洞察の再考という主題群へと展開した。

農業をめぐるドゥルマの語りに関しては、雨季にすらしばしば完全に降雨を欠くという海岸部後背地の環境において、雲の観測に基づく降雨範囲の予測やキャッサバやトウモロコシの栽培

培に適した土壌等に関する知識群が存在する一方で、降雨の時期自体は予測が困難であり、トウモロコシの種を蒔く時期に降雨が続くか否かの運ないし投機的な要素に農業の成否が左右されることが示された。それに加えて、木材の性質に応じた家屋建設に関する人々の語り等からは、多分に経験的ではあっても自然科学の知見と高度な生合成を保つような知識群の存在が示唆された。村落の教会が農学の専門家を招待した上でのトウモロコシ栽培の方法をめぐる講習会を開いた際には、何人かのドゥルマが参加した。早魃こそが真の問題であると参加者達はその印象を語る一方で、地域に自生する植物を用いた除草剤の作成方法や、その効果が市販の農薬に劣ることの指摘等、妖術や憑依霊をめぐる語りや農業を介した生態系との関与をめぐるいわば経験的な農学的知識の蓄積が、霊的世界をめぐる言説と共に村内に流通することが確認された。これはカヌーの建設における流体力学の経験的な知識が遠洋漁業において顕著な呪術と共存するという、トロブリアンド諸島民をめぐるマリノフスキーの古典的議論と呼応する状況であり、上記の呪術と科学をめぐる理論的検討に格好の素材を提供する。農業や病い等をめぐる各種の調査資料に加えて、本研究を通じて、モンバサのみならずナイロビをも舞台とした、都市人類学と宗教人類学の架橋という、新たな研究の構想が得られたことも特筆に値する。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 岡本圭史	4. 巻 28
2. 論文標題 書評へのリプライ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 宗教と社会	6. 最初と最後の頁 67-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Okamoto Keishi	4. 巻 118
2. 論文標題 Apparently Conflicting Ontologies	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Anthropos	6. 最初と最後の頁 335-347
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡本 圭史	4. 巻 95
2. 論文標題 不幸の内在的理解について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 宗教研究	6. 最初と最後の頁 3-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20716/rsjars.95.2_3	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡本圭史	4. 巻 86(3)
2. 論文標題 書評 Richard F. Calichman : Beyond Nation : Time, Writing, and Community in the Work of Abe Kobo	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 文化人類学	6. 最初と最後の頁 502-504
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14890/jjcanth.86.3_502	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 岡本圭史
2. 発表標題 霊的世界との交渉についてーケニア、ペンテコステ派諸教会の事例から
3. 学会等名 「宗教と社会」学会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 岡本圭史
2. 発表標題 不幸の内在的理解について ケニア、ドゥルマ社会における医療と妖術の語り
3. 学会等名 日本文化人類学会第55回研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岡本圭史
2. 発表標題 異人、妖術使い、悪魔 他界と悪の宗教人類学
3. 学会等名 日本宗教学会第80回学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岡本圭史
2. 発表標題 異人に出会う場所 ケニア、ドゥルマ社会における悪魔崇拜言説
3. 学会等名 日本文化人類学会第55回研究大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 岡本圭史
2. 発表標題 モダニティの呪術性 ケニア、ドゥルマ社会の悪魔崇拜言説
3. 学会等名 日本宗教学会第79回学術大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関